

## 私の釣りのマイルストーン・・・

今でこそ長短硬柔取り揃えてロッドを並べることが出来る様になったが、ここまで増え続けた過程を溯って行くと、若かりし頃から手元にある数本に辿り着く。

この中に一本・・・もはや現役を退きながらも別格の様に扱われているロッドがある。

年末にロッドの陰乾し手入れをやる時も、決まって一番最初に取り出されるロッドで、手入れが済んだ後も一番最初に仕舞われて保管場所の一等地に鎮座する。

他のロッド達もこの様な特別扱いを暗黙で理解して、決してこのロッドを越える扱いを使用人である私に期待することはしない。

別に破格であった訳でもなく、これより倍の値がしたロッドもあるが、私の場合・・・購入価格差でここまで扱いが変わることはない。

今となっては、もはや釣り場に連れて行かれることもなく、毎回他のロッドの出陣を見送る立場にあるが、現役で活躍した頃に私の手荒い扱いに耐えながら記された痕跡は、他のロッドとは比較にならないだろう。

グリップは長年の使用で痩せ細り・・・

グリップエンドは土手の滑落事故でひん曲がっている。

トップガイドは2回交換され・・・

他のガイドも何力所か糸溝が出来た為に不細工な交換後が残る。

当然、コイツとの付き合いは・・・娘は元より、家内以上に古い。



このロッドを手にして記憶を溯ると・・・  
走馬灯の如く様々な事が思い出される。  
あのイワナ・・・あのヤマメやあまご・・・と言った魚達・・・  
当時足繁く通った溪の風景やそこで出逢った釣り人の方々・・・

あの頃は何処の溪に向うにせよこのロッドが一番の相棒であった。

私の中では質実剛健で無骨なイメージが消え失せない代物・・・ダイワさんの初代アモルファスウイスキー・・・  
PHANTOM AWF804(8'0" #4)・・・  
ドライフライアクションと謳われたロッドである。  
そしてその記憶を溯ったところ・・・

岐路とも言える出来事と、今へと誘ってくれた人物が思いだされる。

思うにこの岐路を別の方向へと進んでいったら・・・

おそろしく今、「毛鉤を巻いて川に行く」と言うフィッシングスタイルは在り得なかったら・・・

たかもしれない。

話は長くなるが、記憶を溯ってここに記しておく・・・



中学に通う様になって暫くした頃、通学路から少し寄り道して帰れる所に真新しい釣具屋が出来た。

それまでは駄菓子屋や模型屋が店の脇に置いて取り扱う「釣餌」と「消耗品」だけの釣具で賄っていたが、ここは淡水系はもとより海釣りの道具まで取り揃えて本格的に釣道具だけを扱う店だった。

それ以上に驚いたのは店主の年齢である。

当時中学生になったばかりの私は、「おとな」を意識はするものの、未だ「こども」としての自覚があり、私の目から見た「一番近い（若い）おとな」は教育実習に訪れる教師を自指す大学生だった。

しかし、この店の店主はその大学生より遙かに若く、どこから見ても私の五つ六つ上には見えなかった。

今思うと・・・おそらく、高校か短大を卒業して親の援助で店をスタートされたのではなからうか？・・・とも察する。

その時からこの店の「釣具屋の兄いちゃん」との付き合いが始まった。付き合いと言っても、所詮は当時の中学生の釣りであり、タカがしれたものである。

購入するとしても「サバ虫」等の虫餌、「マナギ粉」等の練餌、「鉤と糸」に「重り」の類で、時々高価な「浮子」が混じる程度だったと記憶する。

それでも「釣具屋の兄いちゃん」は親切に対応してくれ、あの池あの中々、色々とポイントを教えてくれては釣果を報告すると言った状況だった。

近郊を流れる猪名川上流の「二庫」にダムができると言った話を聞いて・・・「皆で釣りをしながら居座って仕事を阻止しよう！」と馬鹿らしい方策を真剣に話し合ったのも、この頃の懐かしい思い出として記憶の底にある。

ところが中学も半ばを過ぎると、段々と野暮ったい釣りよりも他の事に興味が湧いて、暫く釣りとは疎遠になり、「兄いちゃんの店」からも足が遠のいてしまった。

再び、「釣り」に舞い戻ったのは、就活を迎えた大学生となった時である。この頃になると釣具も量販店が台頭し始めていて、品揃えや価格面では町の対面式小売店とは比較にならず、「兄いちゃんの店」は忘れられた存在となり、量販店で買い求めた道具類でサーフキャスティングに没頭していた。

そしてある時、知り合いの一人から「御母衣タムのルアー釣り」に誘われ、道具を買い揃える為に量販店に向いたが、淡水コーナー最奥のヘラとタナゴの骨董的釣具が陳列されたガラスケースの隅っこに、申し訳程度に置かれている状況であった。

全くルアーの知識を持たない私が店員に相談すべく質問するも、その質問自体が理解されない・・・全く話にならず困り果てた。

(そうや！・・・)

「兄いちゃんやったら知ってるやるか？」

そして久方ぶりに「兄いちゃんの店」を訪れてみた。



日曜の十時を過ぎた頃……

店の前に車で乗り付けると、兄いちゃんが丁度シャッターの鍵を開けて店開きをするところだった。

私「久しぶり(笑)……今頃店開けてエエの?」

兄「おお!・今まで釣り行っとってん(笑)」

そう言いながらも、私が誰であったかを思い出そうとされた。

兄「自分?・車・免許とったんや!」

私「あのお・ルアー・ちゅう奴やねんけど・知ってる?」

その瞬間、兄いちゃんは誇らしげに笑みを浮かべ、私の問いに答えもせず、ゆっくりと鍵を開けて一気にシャッターを押し上げた。

そこで目に飛び込んできたのは、記憶のある釣具屋の仲間ではなく、見たこともない光景だった。

ルアーで埋め尽くされたショップに様変わりしていたのである。

兄「入りいゝや!」

そして、「ルアー」と言う未知の釣りを解り易く刷り込んでもらい、最低限の道具を揃えて御母衣ダム行きが実現した。

その後も、その頃東条湖辺りから釣れ始めたバスに関して色々教えて頂き、「ここで道具を買い揃えてルアーにハマリ込んで行った。

時には「ダース買い」を条件に、問屋さんに無理を言ってもらい、

ルアーの詰め合わせを変えて好みのカラーで整えてもらったこともある。

そんな無理も「まかしとき!」と快く受け入れてくれ、社会人となっても足繁く通う様になっていた。

想い起せば、私のルアーの基礎とバス釣りはこの兄いちゃんから受けた手解きが基本となっている。

しかし、バスにぞっこんの兄いちゃんに対して、私の釣りは鱈に傾向す

る様になり、在り来たりのスプーンやスピナーしか扱わない「兄いちゃんの店」では満足できなくなってきた。

その頃になると、量販店も骨董品の釣具陳列台の殻を破ってルアーが一

気に溢れたす様にはなっていたが、所詮は兄

いちゃんの店と大差がない。

やはり、国産メーカーのルアーだけでなく、サラマンダーやトビー等を手に入れたかったし、何よりもこの頃に少々気になり始めたフライの道具に触れてみたかった。

兄「自分、ドライフライやったらエエねん。」

私「そんなん・何からどないするん?(笑)」

兄「試しに管釣りのモンタナ・ニンフからで

もやってみい?・最初はシンドイけど何

時かはドライで溪流のあまごやイワナが

釣れると思うでえ〜」

そこで「グラス製のフライロッドとリールのセット物」を取り寄せてもらい、勇んで管理釣り場に向いて見たが、ド素人の私から見ても明らかに他のフライフィッシャーと使用している道具に差がある。

私「あれ・やっぱし他の奴らの(道具)とちゃうわ!」

兄「スマン!・あれ以外は俺もサッパリわからん(笑)」

やはりフライフィッシングが未知の兄いちゃんでは、「コ」までが関の山だったと察する。

そして、本格的にフライフィッシングを始めてみたくなり、とうとう「兄いちゃんの店」に見切りをつけて、聞き伝えて知り得たルアー・フライショップに飛び込んでしまった。



ところが・・・そこで目にしたのは「売価が一桁間違っているのではないか?」と思われるものが自由押しで、「兄いちゃんの店」で購入していたハイエンドの価格帯がこの店のエントリーモデルであった。

色々と相談するも、このマスターの言われるがままに取り揃えると、ひと月の給料が一瞬で吹っ飛んでしまう。

そこで「兄いちゃん」から刷り込まれたルアーの知識を元に、ルアー類からの購入でこの店の真意を図ることにした。

そして漸くマスターとも打ち解けてきて・・・

私「8フィートの#5やったら・・・とりあえず何でもできるんちゃうん?」  
マ「確かに自分が言う通り、最初の一本は8フィートの#5で行けるわ!」  
・・・と言う状況になり、その店で売れ残りのダイワさんのロッドを中心にひと揃え整えてフライフィッシャーの第一歩を踏み出した。

その頃になれば、量販店もルアーの陳列棚が広がってその道の対面式小売店以上の品揃えを誇る様になり始めていた。

こうなるとフライは「マスターの店」、ルアーは量販店・・・と、両者を梯子する日々が続き、益々「兄いちゃんの店」からは足が遠のいてしまった。

フライの腕前も溪流はサッパリだが、管理釣り場では何とか魚が掛けられる様になってきて、思い切って「マスターの店」お勧めの8フィート#5の購入を考えていた頃・・・量販店で一本のルアーロッドを目にするようになる。

そのロッドこそ、ダイワさんが満を持して送り出した初代アモルファス ウィスカー・・・ウルトラライトのスピニングロッドだった。

その場で振ると明らかにそれまでのファントムとは一線を画した感触が伝わってきた。

私「このフライロッドありますか?」

店「これですか?」

私「ちやうどそれバイトロッド!・・・ルアーと違っておてフライ!・・・」

店「ちょっと、お待ち下さい。」

当時、この様なやりとりは別段不思議ではない・・・ルアーは珍重釣具陳列台から溢れ出て広がりを見せる様になったものの、そこに代わって陳列されたのがフライの道具だった。

店「はい?・・・ああフライロッドは取り寄せになります。」

私「8フィートの5番!・・・」

店「あのお・・・前金になりますが、よろしいですか?」

私「エエッ?・・・見てから買うかどおろか決められへんのお?」

店「ごめんなさい!・・・フライ用品・・・取置きはできません。」

私「ほな、エエわ!」

店「すみませえ〜ん!」

「これも営利優先の量販店であれば已むを得ないところであらう・・・」



早速「マスターの店」に向向いて相談することにした。

私「ダイワから新しいファントム出たらしいやん！」

マ「すまんなあゝゝ、ダイワ扱うの止めたんや！」

「これまた取り付く術もなく、あっさりと断られてしまった。

（どうや！ゝゝ兄いちゃんやったら取り寄せてくれるやろか？）

若干、気不味い感じもしたが、

これまた久しぶりに「兄い

ちゃんの店」を訪ねてみた。

兄「自分ゝ完全にフライに転

向したん？（笑）」

私「ううんゝ最近はずフライ

やなあゝゝゝ」

兄「そおるかゝ俺もフライま

では手えゝ出されへんかっ

たなあゝゝゝ」

私「そんな言わんと置いてえ

ゝや！（笑）」

兄「もおゝゝゝしんどい

わあ！（笑）」

私「あのおゝ、ダイワからアモ

ルファスウィスカーって出

たやん！」

「こう切り出すと、8フィート

#5のフライロッドを取り寄

せてもらえないか相談してみ

た。

やはり、兄ちゃんは快く引き受けてくれ、型番をチェックして問屋に電

話を入れて数日後に入ると教えてくれた。

そして指定された日に店に向向くとゝゝゝ

兄「スマン！ゝゝ俺、（発注）型番一段見間違えたみたいでゝゝ

私「？ゝゝゝ」

兄「8フィート#4が来とんねんゝゝゝ」

私「そうなんやゝゝゝ」

兄「取り直してやりたいんやけどゝゝゝ」

私「まっ！ゝゝそれいっぺん振ってみるわ！ゝゝ借り置きで返せるんやろ？」

兄「ああゝゝこれは返せる。」

やはり想像した通り、#4でも物凄く張りのあるロッドである。

（この#5って、結構行けるんちゃうか？）

私「やっぱりエエ竿やわ！ゝゝ#5取り寄せれるう？」

目を輝かせて店先で素振りをする私を見ながら、兄ちゃんはいつものカ

ウンターに立ち、やがて重い口を開いた。

兄「ワシゝゝ店、止めんねんゝゝゝ」

私「はあ？」

兄「この前、問屋に仕入れ止めること言つてもうたんや！ゝゝゝ」

私「ホンマにい？」

兄「そやからもおゝ無理言われへんねんゝゝスマンなあゝゝ」

私「止めるってゝゝこの店閉めるん？ゝゝ何時う？」

兄「まだ決めてないけど、仕事決まったら適当な下」で止めるつもりや！」

私「そうなんやゝゝ淋しいなあゝゝ」

兄「俺も子供もそろそろ学校行くさかいゝゝこんな店しとられへんわ！」

何となくこの前に取り寄せを頼んだ時、「ゝゝゝフライまでは手えゝ出さ

れへんかったゝゝ」と言う表現が少し気になつては居たが、まさか店を止

めるとは思ひもよらなかつた。

もはや私も二十代・・・兄ちゃんは三十に手が届く「おっさん」・・・二人ともそれなりに歳を取っていた。

しかし、まだまだ人生これからで、その時の私には兄いちゃんの新しい人生への門出を祝う気持ちにしかなれなかった。ところが心の片隅で・・・  
「ごおっせー時の気紛れで・・・そのうち・・・やっぱり店・・・続けるわー」と、言い出すに決まってるし・・・と、疑っていたのも事実である。

私「儲かってたんちゃうん(笑)?」

兄「何言うてんねん!・・・もう自分の方が遥かに稼いでんでえ(笑)・・・」

・・・聞くと、兄いちゃんは釣具屋と並行して営む賃貸の家賃収入で生活を成り立たせていたらしく、釣具屋は収支がトントンの状況だったらしい。

兄「結局、道楽やったわ!・・・」

私「でも、それでここまでこれたんやからエエやん!羨ましいわ!」

「こんな話を聞かされて居るにも係らず、軽い気持ちで聞き流しながら取り寄せてもらった8フィート#4を店先で振っていた。

(コイツでもエエかな?・・・この前#4ライン買おうたし!)

私「これもエエわあ!貰おとくわ!(笑)」

兄「はあ?#5ちゃうんか?・・・無理せんでエエで!」

私「いや・・・これも結構行けよあや!」

兄「無理せんでエエで!・・・これは(問屋に)返せるし!」

私「実はこないだルアーフライ兼用の安い竿買おうてん!・・・」

兄「兼用ロッド?・・・」

私「それが#4でラインも買おうたトコやねん!」

兄「そんなロッドあんの?」

私「衝動買い!(笑)」

兄「自分らしいなあ(笑)」

私「あれえ〜店員がエエ加減な〜と言ってるわ!・・・」

兄「・・・?」



私「ど〜見ても短めに捲えたフライロッドやし!(笑)」  
兄「いろいろあんねんなあ〜・・・」

私「アソコ(量販店)はアカンわ!・・・」

兄「何があ?」

私「皆、知らもん!・・・この釣り(ルアーとフライ)・・・」

兄「そやけど・・・これからの釣具屋はあんな店やでえ〜・・・」

私「そあ〜なんかなあ〜?・・・」

兄「ほな、これ・・・サービスしとくわ!」

私「そやけどそんなんすっし!儲かれへんのんちゃうん(笑)!!」

兄「まあ・・・損してへんし!」

私「おおきに!(笑)」

兄「それに、久しぶりやでえ〜ロッド売れたん!(笑)」

私「また、来まっさ!(笑)」

兄「ありがとう!もうちょっとは店やってると思っけど・・・」

私「また来るし!それまで止めたあ〜アカンでえ〜・・・(笑)」

兄「ありがとう!・・・まあ、頑張っつて釣っつて!」

これが最後の会話になるとは想像すらできず、笑って店を立ち去った。

ハンドルを握り、車を走らせてバックミラーを見ながら信号待ち・・・

(なんでやる?店閉めるなんて言っつたかい・・・ついつい買おうてもたし!)

店を出た途端、兄いちゃんの誤発注で届いた#4を、単なる素振りで魔が差した様に買ってしまった事に一瞬後悔したのも事実である。

「どおし止めへんに決まってるし！」(笑)・まあ、エエわー!」  
とにかくその頃はフライがやりたくて仕方なく、フライ用品を扱わない  
「兄いちゃんの店」よりも、無限の可能性を秘めた「マスターの店」に気  
持ちは完全に傾いてい  
て、暫く疎遠になること  
は明白である。

この衝動買いが、一時  
的にこの店を離れる事  
になろう「お饞別」の様  
な物とも思えてきた。

案の定、それから暫く  
は「兄いちゃんの店」に  
立ち寄る事もなくなり、  
「マスターの店」に入り  
浸ることになる。

そして漸くフライで  
「釣れた」のではなく  
「釣った」と確信した時  
に、報告がてらに訪れて  
みた「兄いちゃんの店」  
は重々しくシャッター  
が閉ざされていた。



「あれ?・・・ホンマに止めたんか?・・・」  
「・・・でも看板のままやし!・・・また開けるつもりやろ!」(笑)

その後、マスターにそそのかされて、結局お勧めの8フィート#5を購  
入し、コイツを私のメインロッドとして考えていた。

ところが、ルアーの場合でもフィールドによってロッドを使い分けるの  
は当り前のことで、フライにおいてもこの辺りが気になりだした頃・  
ロッドに対する自分の思惑と実態が少々異なっている事に漸く気が付き  
始めた。

確かに管理釣り場ではマスターお勧めの#5がじっくり行ったが・  
溪流のドライフライは、兄いちゃん大失態の#4が、若干秀でてい  
るに感じてならなかった。

「そんなハズはないやろ?・・・俺の腕の悪さが原因かあ?」  
・・・と、まずは自分自身を疑った。

当初難解を極めた入門書に対しても、記載内容を若干斜めから見  
て重軽を見抜ける様になりつつあったが、フライロッドに対しては  
この様な教本に記された基準を鵜呑みにするしか手立てがなかった為である。

そこで・・・  
「一般的には#5の7フィート半が標準で8フィートでも可能・・・」  
・・・と、言う謳い文句を信じて7フィート半#5を手に入れ・・・  
「小溪流では#4の7フィートが最適で長くても7フィート半まで」

・・・との謳い文句にマスターが強く勧める7フィート#4を購入した。  
しかし、結果は同じだった。

「もうエエ!・・・誰がなんちゅうても、溪流のドライはコイツが一番や!」  
斯くして、溪流ドライフライ御用達として選ばれたロッドは兄いちゃん  
が誤発注したアモルファススイスカアの8フィート#4だった。

それからは・・・釣りと言えは、まずこのロッドでドライフライが  
出来る「溪流」に足繁く通い込む様になる。

そして、遂にフライ一辺倒となり、ルアーとともに「兄いちゃんの店」

も記憶に留める通過点となり始めた頃・・・

「ホンマに止めてまいよったんや！・・・看板外れてるし！」

(・・・あの竿、ホンマに饞別になってもおもしろい！)

「兄いちゃんの店」は・・・そこが釣具屋であった事を知らしめる術もなく、生活感が漂う単なる住宅に様変わりしていた。

色々な事が思い出された・・・

中学生時代の趣味であった釣りを支えてくれた事・・・

再び釣りを趣味とした頃に、

先導する様に「ルアー・フィッシング」に誘ってくれた事・・・

そして最後に・・・私に最も相応しいロッドを渡して、

未知なる「フライ・フィッシング」に送り出してくれた事・・・

常に兄いちゃんは私の釣りに【マイルストーン】を描き示し・・・

着々と【礎】を築いてくれていた。

最後の挨拶は出来なかったが、兄いちゃんの新しい門出である。

(まあ・・・頑張ってたえくや！・・・色々ありがとう！)

そう念じてその場を立ち去った日から、二度と訪れることもなくなり、このロッドを持って・・・溪を彷徨う釣り人となって行った。

思い出せば、この8フィート#4が、その後の私の釣りを決定づけた  
と言いつても過言ではないだろう。

その後コイツは「あのロッドも良すぎやな？」と言う私の浮気心を嘲  
笑う様に打ち砕き、決して他のロッドを寄せ付けずに十年以上もメイン  
ロッドとして君臨したのである。

しかし、もしあの時・・・

兄いちゃんが間違わずに頼んだ通りの#5ロッドが届いていたら・・・  
きっと私の釣りは大きく遠回りをする事になったかもしれない。

いや・・・もしかすれば・・・ルアーを止めずに・・・

「毛鉤を巻いて川に行く」と言うフィッシングスタイルとは、

異なった釣り人生を歩んだ様な気もする。

ある意味、私の釣りの岐路とも言える出来事であった。

そう考えると・・・兄いちゃんの大失態と思えた「誤発注」自体が・・・

「これからは、このロッドに記された【マイルストーン】を目指せ！」

・・・と言う、最後の粹なの計らいであった様な気がしてならない。

PHANTOM AMF804 (8'0"#4)・・・

私のフライフィッシングの原点・・・

四半世紀に及ぶ趣味の入口で差し示されたマイルストーン・・・

今現在、他のロッドとは一線を画し・・・

別格としての扱いを受ける理由が「ニ」にある。



あとがき

昨年5月の天増川で久方ぶりにこのロッドを使って見た。

鎌首をもたげる蛇の様に突き刺すループが飛んで行く#4ライン・・・十数センチの溪魚を相手にするには、在り余るパワーを秘めた#4ロッドであることに、あらためて驚かされた。

一時期は老骨に鞭打つ状態と思っていたロッドも、  
まだまだ若々しく衰えを感じない・・・

むしろ・・歳をとって衰えて来たのは私自身である。

コイツが奏でる釣りのリズム・・・

(だるい振り方すな・・もっと早よ歩け！)

・・と、ロッドに急ぎ立てられてる様な気がしてくる。

懐かしいアップテンポだが、全く体がついて行けなかった(笑)。

「お前ホンマに変わらんなあ(笑)・・ちよとお・休憩！」

・・と、半ば諦めた私に・・

(老骨扱いして引退させあがって・・老いぼれたんはお前やろ！)

・・と、見事に罵られた様な気がした。

情けないが、もはやこのロッドを若かりし頃の様に扱える体力はない。

私も来年は五十歳・・

あの兄いちゃんもとつくに五十過ぎになっているだろう。

「未だあの店で働いてるんやろか？」

今から十年程前、このロッドを引退させて暫くした頃だった。

所用で電車に乗って出掛けた先で、たまたま見つけた釣具量販店になんとなく立ち寄った時である。

カウンターの前で「練餌」を拵えながら客と話をする店員さんが居た。

そこに若い店員がルアーを持って来て何やら話をしている。

客に断りを入れて「練餌」をカウンターに置き、ルアーコーナーにすっ飛んで行った。

(あれっ！・・なんや！・・こんなとこで元気にしてるやん！)

この店員さんこそ・・ここに記した「兄いちゃん」ご本人だった。

(やっぱり釣り道具商売から離れられへんかったんや！・・)

カウンターに戻ってきたら、声を掛けてやろうと思った瞬間・・

「止めとけ！」・・と逆の思いが強く押し掛かってきた。

若かりし頃から店を立ち上げ、

客との対話によって営んできたご自分の店が・・

量販店の台頭により廃業せざるを得なかった状況を推して図れば、

とても人生の再スタートとして祝福できたものではなかったらう・

あの頃、兄いちゃんの廃業を「新しい門出」と感じた事も、

自身の若気の至りでご本人は苦渋の決断であったと察する。

(兄いちゃんも・・こんな形でワシと再開しとあうはないやろお・・)

そう思った時には、既に店を出てしまっていた。

そして今、「兄いちゃんの店」が無性に懐かしく想える時がある。

これも誠に勝手な願いであらうが・・

兄いちゃんもそろそろ還暦に向けて・・

再び店を始めてくれないものだろうか？

まあ・・有り得ない夢話ではあるが・・

しかし、もし店が再開すれば・・

まずはこれまでの話をしたり聞いたりしながら、

さりげなく次のマイルストーンを記してもらいたい。

その後は当然、無理難題を持ちかけて・・

足繁く通う一番の客になることは間違いないと想われる。